

スケジュール	
09:20~09:30	オープニング
09:30~11:00	巨人と創った近代修復治療の夜明け ● 桑田正博
11:20~12:50	デンティンボンディングシステムの登場が変えた今日の修復治療 ● 伊藤和雄
12:50~14:00	休憩
14:00~15:00	メインテナンスセラピーがもたらす修復治療の信頼性 ● 岩切明美
15:20~16:50	修復治療の今日、そして明日に向けての課題 ● 茂野啓示
16:50~17:30	ディスカッション：修復治療の明日 桑田正博・伊藤和雄・岩切明美・茂野啓示／司会・柳与志晴

協賛会社 (五十音順)

医歯薬出版株式会社
 株式会社オーラルケア
 株式会社近畿レントゲン工業社
 株式会社松風
 株式会社デンケン
 株式会社ニッシン
 株式会社茂久田商会
 株式会社ヨシダ
 サイブロン・デンタル株式会社
 ノーベル・バイオケア・ジャパン株式会社
 白水貿易株式会社
 ベントロン ジャパン インコーポレイテッド

お問合せ先

北山補綴研究会 (有限会社アワデント内)
 〒862-0921 熊本市新外4丁目6-65
 Phone: 096-331-0576
 Fax: 096-331-0577
 E-mail: taka@ourdent.com

●財団法人京大会館楽友会 京大会館 案内図



〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9
 Phone: 075-751-8311 (代)



北山臨床研究会学術講演会 修復治療の 昨日・今日・明日

近代修復治療の夜明けから
 デンティンボンディングの登場・メインテナンスの再認識・再生医療
 ……を語り尽くす

開催日時: 2006年12月3日 (日)

会場: 財団法人京大会館楽友会 京大会館 会議室



Kuwata Masahiro



Ito Kazuo



Iwaki Akemi



Shigeno Keiji

1960年代初頭のセラモメタルクラウンの登場により世界的なレベルで広まった近代修復治療は、その後、保存修復治療における1980年代のデンティンボンディングシステム登場の大きな影響を受け、今では「歯冠修復治療」「保存修復治療」という、修復範囲をもって、単純に区別をすることができないような状況となってきている。しかし、この半世紀の進歩は、病態（齦腫、顎機能・咬合、歯周疾患等）の適切な診査・診断、デンティンボンディングシステムに基づく生体への低侵襲、そして最小修復物の設計を可能とし、さらには、メインテナンスシステムの向上と相まって修復治療後の再発の危険性も著しく減少した。このように、歯科医療はエンドレスの対応療法、フォローアップから、ようやく医療として成熟した状況を迎えるに至った。このような素晴らしい歯科医療の進展をもたらした本質は何であるのかを明確に認識することは、現代に生き、そして未来を創る責務のあるわれわれ歯科関係者の最も理解すべきことと考え、本シンポジウムでは、近代歯冠修復治療をもたらした約半世紀前の修復治療の原点を探り、そしてそれがデンティンボンディングシステムの登場とメインテナンスシステムの向上により、今日の臨床をどのように変えていったかを明らかにする。そして、再生医療の導入等でこれからの修復治療が、どのような未来を迎えようとしているのかを展望するものである。

主催: 北山臨床研究会

巨人と創った 近代修復治療の夜明け



桑田正博
Kuwata Masahiro
愛歯技工専門学校校長
クワタカレッジ校長
ボストン大学歯学部客員教授

セラモメタルクラウンの基本理論を開発した Sigmund and Gerry Katz 夫妻、そしてセラモメタルクラウンの技術的な成功のための臨床術式を一緒に確立した Dr. George Straussberg、PMS テクニックの提唱者で一緒に咬合治療に参画した Dr. Clyde Schuyler、エマージェンスプロファイルの研究を一緒に行ったボンティックデザインでも有名な Dr. Robert S. Stein、大論争後に親友となった Dr. Peter K. Thomas との仕事を通して、近代修復治療の骨格といえる支台歯形成、クラウンの設計といったことが決定されていった過程。そして、その延長線上に現在のオールセラミックスクラウンのシステムを含めたさまざまな修復治療の動きが存在することを講演する。

デンティンボンディングシステムの 登場が変えた今日の修復治療



伊藤和雄
Ito Kazuo
昭和大学歯学部
歯科・歯内治療学講座 助教授

エナメル質ではなく象牙質に対する特異な処理として用いられるプライマーが登場しデンティンボンディングシステムは確立をしたが、そもそもデンティンボンディングシステムとは象牙質被着面表面にどのような現象を作り出すことなのか、それは接着に有利なエナメル質とどのように異なるのか、あるいは同じものなのかを説明したうえで、妥当な被着面の現象を創出するうえでどのような処置を行えばよいのか、また、そのための材料には何を使用したらよいのか解説する。そして、このようなデンティンボンディングシステムの登場により臨床がどのように変わったのか、実際の臨床例を用いて解説する。

メンテナンスセラピーがもたらす 修復治療の信頼性



岩切明美
Iwakiri Akemi
歯科衛生士・フリーランス

審美的な要求から歯肉縁下に修復物のマージンを設定する、あるいはボンティック基底面を歯槽堤粘膜に接触させることも日常的に行われている、このように歯肉、歯周組織と人工物である修復物とが接触する環境下では、当然、生体組織のみが複合する環境よりも歯周疾患や歯槽骨の吸収等のリスクが大きい。したがって、修復処置を施す前に歯周環境や歯槽堤粘膜の環境を整えることは前提となるが、そのうえで、修復物装着後も適切にメンテナンスを行うことが、修復治療を安定的に継続させるうえで重要となる。このようなことに關して、事例を交えて解説する。

修復治療の今日、 そして明日に向けての課題



茂野啓示
Shigeno Keiji
北山茂野歯科医院院長
京都大学再生医科学研究所非常勤講師
(医学博士)

先の3講演を受け、齶頰治療、顎機能・咬合治療に対するコンボジットレジン修復、ポーセレンラミネートベニア修復、ポーセレンインレー・アンレー修復、クラウン修復の現在を、主に診査・診断さらに修復治療の鑑別診断の点から整理、解説する。そして、今日の修復治療を客観的に観察した場合、それに欠けているもの、できれば実現したいことを、未来への課題として整理、解説する。

■ディスカッション

修復治療の明日

桑田正博・伊藤和雄・岩切明美・茂野啓示
司会・柳与志晴